

横浜市歴史博物館

紀 要

BULLETIN OF YOKOHAMA HISTORY MUSEUM

研究ノート

朝光寺原式研究に関する覚え書き……………坂本 彰 1

資料紹介

戸塚宿問屋場における「人馬日々帳」の紹介
一たとう紙に利用されていた古文書の復元から一
……………仲泉 剛 (1)

VOL. 30
2026. 3

目 次

研究ノート

朝光寺原式研究に関する覚え書き

..... 坂本 彰 1

資料紹介

戸塚宿問屋場における「人馬日ノ帳」の紹介

—たとう紙に利用されていた古文書の復元から—

..... 仲泉 剛 (1)

朝光寺原式研究に関する覚え書き

坂本 彰

はじめに

筆者は宮田 毅と共に、2021年から未公表の朝光寺原式土器等の資料化を進めてきた（坂本・宮田 2021b・2022a・2022b・2024・2025a・2025b）。このほどその一部について、著名な弥生土器研究者の渡辺 務・古屋紀之さんから意見をいただいた。「一言なかるべからず」という内容なので、宮田と相談のうえ筆者が小文を作成した（以下、敬称略）。

1

南関東の弥生後期櫛描波状文土器は、北関東樽式の分派として知られていたが（杉原 1939）、3つの特徴（櫛描波状文が主・壺と甕の分化が不明確・台付甕が存在）によって樽式と分離し、朝光寺原式が設定された（岡本・武井 1969）。以後、多摩丘陵周辺の資料激増によって朝光寺原式の研究は急速に進展したが、出土例の知られない台付甕は研究の枠外に置かれていた。

2020年に至り、筆者は神奈川県立歴史博物館所蔵遺物の中に、大熊宮原遺跡出土の台付甕（図 2-1）を再発見し（坂本 2021a）、これが型式提唱時の基準資料にあたると報告した（坂本・宮田 2021b）。次いで、三殿台遺跡の弥生後期資料中にも、朝光寺原式の台付甕（図 2-2）が存在すると指摘した（坂本・宮田 2022a）。

渡辺は両遺跡の台付甕を当初から注目していたものの、①出土例がない、②遺跡が朝光寺原式の分布圏外、③器形や文様が異なる、ことから「朝光寺原式土器の器種構成に台付甕は含まれない」と明確に否定した（渡辺 2025）。

このうち①については、大熊宮原例の存在を承知していたならば、何らかのコメントをするのが研究史のあり方と考える。三殿台例については、松本 完さんの示唆に導かれたもので、それを文中に明示しなかったのは筆者の不手際であり、お詫びしたい。

②については、古く川崎市南加瀬貝塚に朝光寺原式土器の破片（図 2-4）が見られ（MUNRO 1911）、港北区新羽大竹遺跡でも報告され（岡本孝之 1980）、いずれも大熊宮原遺跡より東方である。港北ニュータウン遺跡群では、都筑区権田原遺跡の弥生後期住居址から破片が出土している（古屋 2014）。

都筑区北川表の上遺跡では、46号住居址の床面にナデ甕、覆土に波状文の大型破片があり、「朝光寺原式土器の年代観では弥生時代後期中葉」と報告されている。また 106号住居址床面からは3点の朝光寺原式土器（1点は略完形の櫛描波状文（図 2-5）、他は波状文）が出土し、後期中葉と位置付けられた（坂上ほか

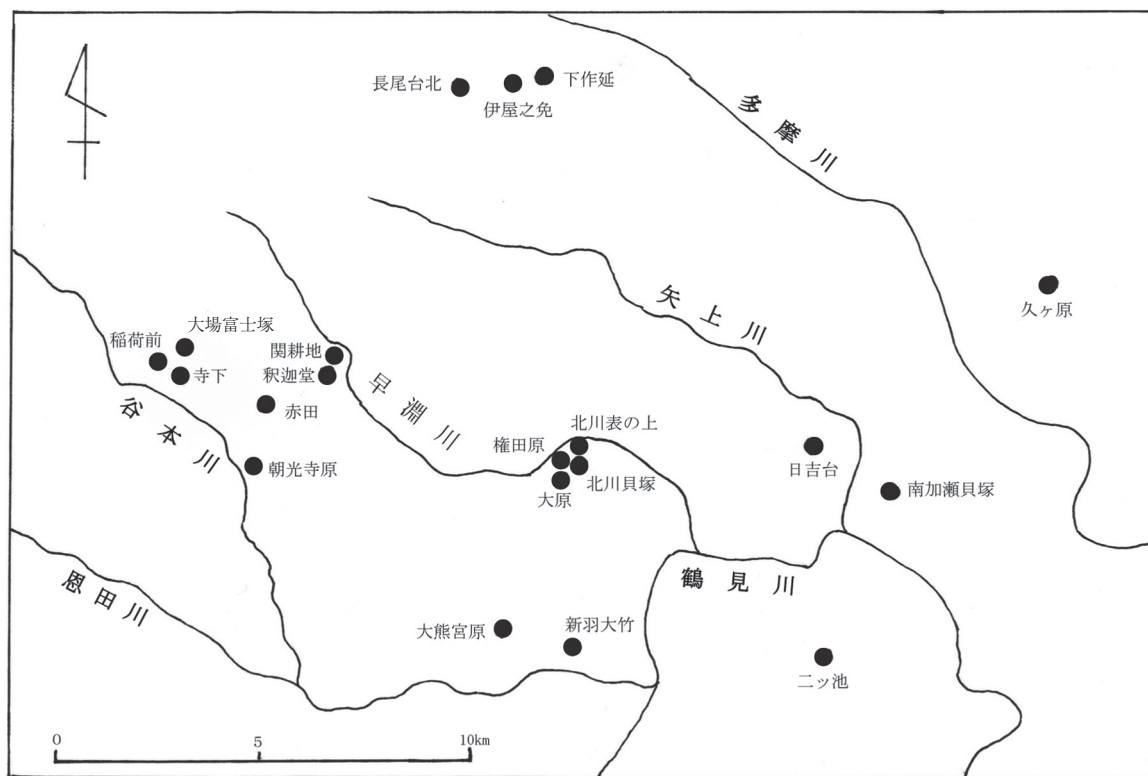


図1 本文関係遺跡位置図

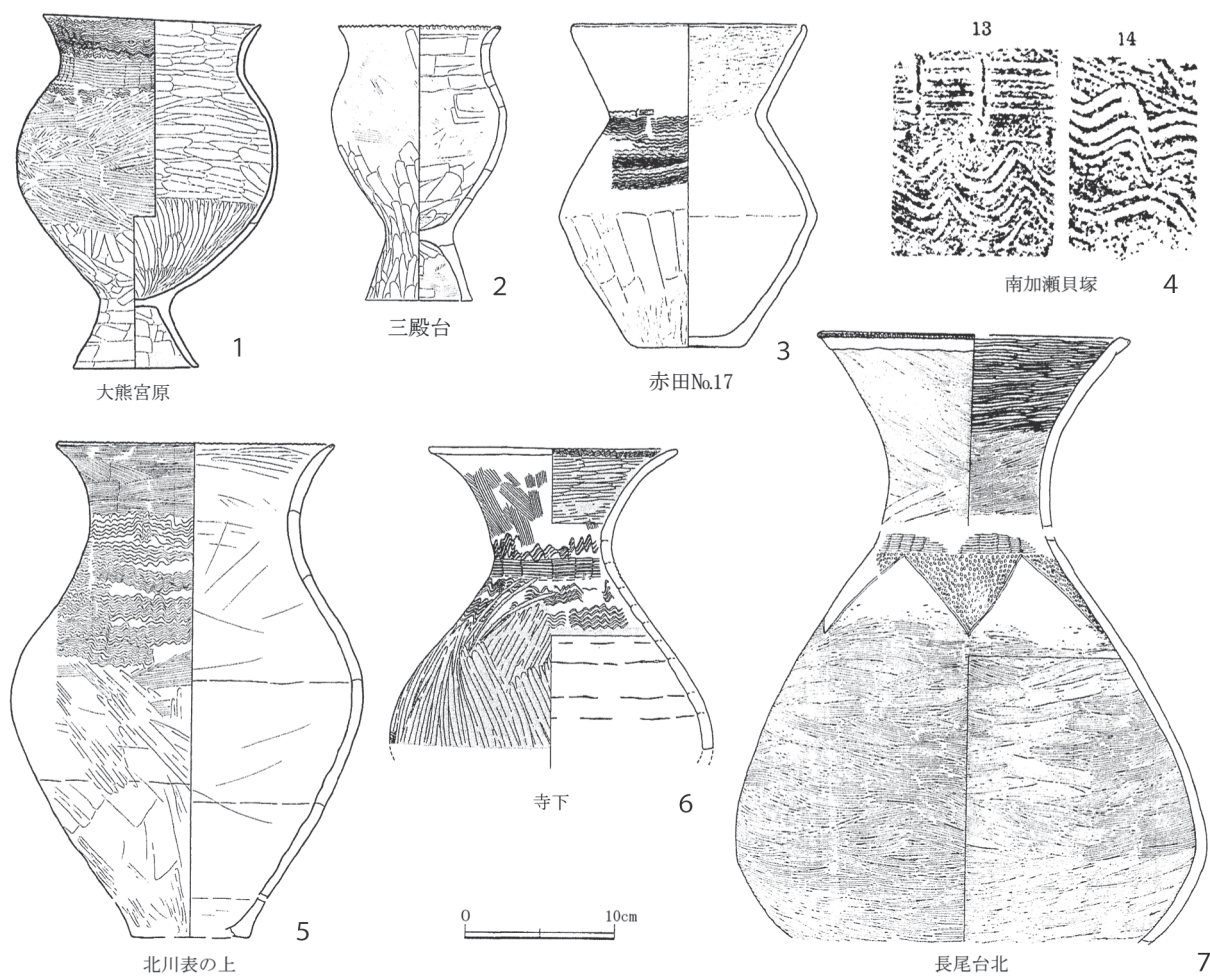


図2 朝光寺原式・中部高地系土器（各報告書より）

2009)。このように、北川表の上遺跡には、明確に朝光寺原式期の小集落がある。上述の各遺跡の位置を含めて考えると、大熊宮原遺跡は決して孤立した存在ではなく、朝光寺原式の東方分布圏内に存在しているといえよう（図1）。

③については、大熊宮原遺跡が例外的な存在であると強調している。しかし異例だといって否定すべきではない。青葉区赤田№17YT6出土の壺（図2-3）は、器形の点において、かつ東京湾岸系土器がその役割を果たしていたという点からみて異例な存在である。しかしその異例さについて説明がなく、朝光寺原式（赤田Ⅳ期）として扱っている（渡辺1998）。

渡辺は、大熊宮原例が「箱清水式か樽式土器の影響を受けて当地で制作された台付甕」と結論している。朝光寺原式が北関東もしくは中部高地の系統ということは、周知の学説である（橋本1980、神村1988、松本1993）。したがって上掲渡辺見解は、大熊宮原例を朝光寺原式と認めたに等しい。ただし朝光寺原式最古段階とする長尾台北遺跡に中部高地系の壺（図2-7）が存在することは知りつつも、甲府→多摩ルートは否定し、荒川→多摩ルートを主張している（渡辺1997）。

さらに同論では、従来の朝光寺原Ⅰ式をⅡ古式とし、寺下遺跡出土土器を朝光寺原Ⅰ式とする新編年案が提示された。その朝光寺原式壺（図2-6）の器形は、長尾台北遺跡第の中部高地系壺と瓜二つである。この新編年はまた、朝光寺原式研究の一指針となるものと考えられる。

2

古屋からは昨年5月末、坂本・宮田2025aの中に「誤読があるので紀要次号にて訂正してほしい」旨の要望があった。対象部分は『紀要』29号14～15行目、「古屋紀之は・・・（中略）・・・南武蔵南部様式（久ヶ原・大原式）を提唱した」である。指摘されたのは、「南武蔵南部様式に“久ヶ原式”は含めていない」というものであった。

筆者は、古屋2018（以下、旧論）中の、「図12 従来の久ヶ原式・弥生町式に代わる様式・型式名の整理案」と題された表（図3）を典拠とした。そこには「後期前半－久ヶ原式」、「後期後半－大原式（久ヶ原式系）」と並記されているので、両方を記しただけである。後半のみが必要であれば、なぜ前半も記したのか意味がわからなかった。

その後まもなく、宮田から、久ヶ原式の後継様式－幾何学文壺の系統整理－大原式の設定」（古屋2025a、以下「新論」）のコピーが届き、ようやく事態が呑み込めた。そこには前掲図12の表も示され、498頁12～13行目に、「これが後期後半の「南武蔵南部様式」の把握である」と明

	後期前半		後期後半
東京湾東岸	久ヶ原式	→	山田橋式（久ヶ原式系）
南武蔵南部	久ヶ原式	→	大原式（久ヶ原式系）
南武蔵北部	下戸塚式前半 菊川式・久ヶ原式混在	→	下戸塚式後半 狭義の弥生町式（東海東部・相模系） 仮称田端道灌山式（久ヶ原式系） 混在

図12 従来の久ヶ原式・弥生町式に代わる様式・型式名の整理案

図3 誤読指摘に関する表（古屋2018原図）

記されている。新論が掲載された『斗酒百篇－弥生時代探求－』と、小文が掲載された『横浜市歴史博物館

紀要』第29号の刊行は同じ3月末である。自著で「後期後半」としたものが、一方で「後期前半」を含めて記述されていることは、第三者から矛盾と指摘されかねない。そこで筆者に訂正を要求したものと推測される。しかし筆者は、5月末まで新論の存在をまったく知らず、申し入れ時に何の説明もなかったので対応不能であった。

古屋の旧・新論は、この半世紀混迷を続けている「久ヶ原・弥生町問題」の解決をめざしたものとある。しかし、込み入った難問に関するものであればある程、無用の誤解を招かないように分かりやすく丁寧な説明が必要ではあるまいか。論文は、論者の専門性を十分に理解し得る研究者だけではなく、筆者のような初心者も目を通す可能性があるのだから。

「南武蔵南部様式」は新論によって「大原式（土器様式）」に昇華した（新論504頁7行目）。したがって過去の文章に対して訂正する意義は感じないが、あえて教えてくれたのであるから「久ヶ原式」を削除するのはやぶさかではない。今後はより正確な把握を心掛けるが、この一件を読者の方々はどうに思われるだろうか。

3

大原式は横浜市港北ニュータウン遺跡群の中の一つ、大原遺跡の弥生土器に由来する。まったくの偶然であるが、同遺跡は、1981年に鈴木重信と筆者が発掘調査を行った場所である。第三京浜道路の車を見ながら、夏場の暑い時期に調査を進めた。環濠の東北部は欠失していて、西溝の一画から土器がまとまって出土した。遺跡南西部の高みで、ブルドーザーの削平面から拾い上げた鉄片は、なんと鉄釧であった。環濠内方形周溝墓の主体部も浅く、ヒスイ勾玉やガラス小玉が良く残っていたものだ。調査結果は翌年速報した（坂本・鈴木1982）。

1970～89年の港北ニュータウン遺跡群の発掘調査は、各時代の集落址の全容解明が課題であった。課題達成のためには十分な調査体制と時間が必要だが、それに見合うだけの状況は存在しなかった。大原遺跡を含む新吉田地区調査の頃は最も酷く、北川貝塚も二人で行ったが、工事の進捗状況に合わせて権田原や北川表の上遺跡に出向き、調査員一人、作業員少数が転戦するという有様だった（図4）。



図4 北川貝塚・大原遺跡の調査メンバー（後列左：鈴木重信、同右：坂本）

それに加えて、港北ニュータウン地区最大の縄文集落址、三の丸遺跡の発掘も同時進行しており、自遺跡調査定時終了後は日没まで応援に駆け付けた記憶がある。このような中で筆者は、大原遺跡の調査終了後に西ノ谷貝塚の調査に移ったため、広大な権田原・北川表の上遺跡の全容解明は鈴木 of 献身的な努力によって達成されたのであった。

鶴見川流域の弥生後期遺跡は約 300 カ所を数えるが（坂本 1975）、その大半は散在であり、地域的に集中の実状が判明した例は少ない。早淵川上流の荏田周辺、小黒谷遺跡を含む赤田遺跡群（渡辺 1994・1998）と、それに隣接した関耕地遺跡を含む観福寺遺跡群（田村 1997、平子 1989 など）は良好な弥生後期遺跡群といえよう。

新吉田地区では、弥生後期集落の集中が明らかになりつつある時、この遺跡群こそ港北ニュータウン地域で当該時期解明の有力な手掛かりになるとの予感があった。しかし調査終了の翌日から新しい遺跡へ向かうような状況の中では、各自がそれぞれの課題を消化することが精一杯で、週一回の会議でも全員で向き合うようなエネルギーは残っていなかった。北川貝塚は筆者最後の報告書となったが、弥生後期集落址については事実報告にとどまっており、まことに汗顔の至りである（坂本・山田ほか 2007）。

残り 3 遺跡を整理した古屋は、権田原・北川貝塚・大原・北川表の上遺跡を「北川谷遺跡群」として把握し（古屋 2011）、弥生中期～古墳前期の「北川谷編年」を提示した。その基盤に基づいて提唱したのが「大原式」である。「発掘調査は報告書刊行をもって完了」という原則からすれば、手渡したバトンを受けて無事にゴールインとなったのであり、筆者は感謝するのみである。

今年 8 月になってから、北川谷遺跡群をメインテーマとするブックレットが刊行されていることを知った。大原式をはじめ、南関東の弥生後期土器がかなり専門的に説明されている。刊行の経緯では、「考古学の記事でマスコミを賑わすのはたいてい発掘時のセンセーショナルな発見であるが、歴史を再編成する作業のほとんどは、その後の迂遠ともいえる「整理」と「研究」による「再発見」なのである」と報告・研究の重要性を説いている（古屋 2025b）。広い目で見れば、これも「遺跡群研究」の成果の一つといえよう。ちなみに、同書の刊行は新論と同じ日である。

4

大原式は「様式」であって、「型式」ではない。これについて新論の註 3 では、「ある地域に共存する土器群のまとまりに対しては「様式」という概念」、「型式」は同一系統の土器群のまとまりとして認識できる単位」と区別している。しかし「久ヶ原式は単一型式で存在する範囲に限って、様式＝型式となる」と説明されており、その変幻さに理解が困難である。そこで、大原式を理解するために、管見に入った「様式」と「型式」についての解説を抜き書きしてみた。

- 型式は「地方差、年代差を示す年代学的単位」、「一定の形態と装飾を持つ一群の土器」、「適宜遺跡名を付けて呼ばれる」－山内型式論（山内 1932・1964・1967）
- 様式は「斉一性概念」、「物として実在しない」、「様式差が文化の比較の尺度」、聚成図の配列のうちに沈黙の言葉としてある程収められてゐる」（集成土器をⅠ～Ⅵ様式に分け、Ⅰ～Ⅴ様式が弥生式）－小林様式論（小林 1938）
- （下作延遺跡出土の）「土器三個は一緒に出たものであって、各例共特有の性状を持ち、所謂久ヶ原式と一致しない。明に一型式の存在を示すものである。その年代は弥生式後半に当るであろう。」（山内

1640・1967)

- 「考古学的方法においては、型式・形態・様相の三概念」、「限定者としての型式」、「型式は全体的な人格を表すのではなくて、個人的な人格を示す」、「(型式) 須和田式土器・宮ノ台式土器・久ヶ原式土器」－杉原型式論 (杉原 1943・1965)
- 「南関東地方」 「第Ⅰ様式土器－須和田式土器、第Ⅱ様式土器－小田原式・宮ノ台式土器、第Ⅲ様式土器－久ヶ原式土器、第Ⅳ様式土器－弥生町式土器、第Ⅴ様式土器－前野町式土器」 (杉原 1964)
- 「弥生町式土器は、久ヶ原式土器から発展した型式で、歴史的な東京都弥生町遺跡出土土器を標識とし」 (神沢 1966)
- 「私たちは既に「型式」・「形式」・「系統」・「系・系譜」という記号を獲得している。北九州や近畿地方のように、同時期ではあるが内容の異なる土器を理解するための「様式」は関東にはいない」 (伊丹 1992)
- 「朝光寺原様式の基礎的研究」、「南関東地域で前述の様式圏の周辺に存在する固有な様式として、吉ヶ谷式、朝光寺原式、臼井南式など」 (渡辺 1995)
- 「縄文を帯状に施文する西相模様式、南武蔵様式、房総様式で構成される南関東、「久ヶ原式」の伝統性と、外来新出要素が共存する南武蔵様式」、「南武蔵様式と朝光寺原式の共存例」 (比田井 2002)
- 「南部の土器型式は関東方面と」、「縄文晩期末に中部・関東・東北部に広く展開した千網式など浮線文土器型式群」、「註 35 石川は、弥生土器研究においても「土器型式」の語を用い、「土器様式」は用いていない」 (石川 2003)
- 「(二ッ池式について) 「僕は様式論とさようならと決意しました。ですから自分では今後、様式という言葉は一切使いたくない」 (黒沢 2005)
- 「(久ヶ原 2 式について) 「遺蹟の形成プロセスと「土器型式」は切り離すことができない。住居址から出土する破片や遺構外出土の土器片も遺蹟形成にかかわった廃棄であり、それらはその遺蹟における土器群の変遷プロセスに深く関与しているはずである。そうした情報を新旧に秩序立てるのが型式学」、「極論すれば 10km から 20km 程度の最小分布単位に「土器型式」が成立している」 (鈴木 2009)
- 「様式概念の重要性」、「土器の使い方に着目した場合、この様式概念は真価を発揮する」、「後期中葉～後半の段階になると伝統的な土器の壺・甕と朝光寺原式土器の甕だけで様式を形成する」 (浜田 2015)
- 「東京湾西岸地域の弥生時代終末期の土器型式としては、武蔵台地において前野町式 (杉原 1961、大村 1982) や円乗院式 (菊池 1974) が設定されているが、基準となった資料を見る限り、いずれも日吉台遺跡群出土土器とは大きく異なる内容をもつ土器型式と言わざるを得ないものである (安藤 2019)

弥生土器の呼称は研究者によってさまざまであり、それぞれの研究背景により異なっている。戦後日本考古学を総括した『日本の考古学Ⅲ』で地域別にみると、様式 (近畿、中国、四国、北陸、東海)、型式 (中部高地、関東、東北)、形式 (九州) と分かれている。全体をまとめた編年表では、近畿のみが第 1～第 5 様式と表示し、他はすべて遺跡名をあげている (和島編 1965)。

小林様式論は、広域土器の序列を定めるために創設され、「物として実在しない概念」である。杉原は、「人格を示す」型式論を主張し、様式は、小林との共著『弥生式土器集成 本編』以外では使用していない。

先に類例をあげた関東地方の研究者は、おおむね明治大学関係が型式を、他大学関係が様式を用いている場合が多い。したがって、明治大学考古学研究室 (石川日出志先生) において、「型式学や土器論」を「徹底的に叩きこまれた」 (新論 505 頁) 古屋が様式を用いているのは、意欲的・創造的な研究をめざしている

ためと思われる。

5

大原式は「弥生時代後期後半の東京湾西岸の土器様式」で、器形は壺を中心に台付甕・広口壺・鉢・高杯などがある（新論図 12～15）。大原 1 式は後期中葉、同 2 式は後期後葉に大別され、それぞれ古・新に細別し、計 4 段階に編年されている（新論表 1）。

提示された土器を遺跡別にみると、大原 1 式古段階 13 点（影向寺台周辺－1、北川表の上－6、新羽大竹－2、神ノ木台－2、鶯谷－1、白楽－1）である。大原 1 式新段階 12 点（二ッ池－3、大原－6、北川上の上－1、寺谷戸－2）である。大原 2 式古段階 12 点（釈迦堂－2、大原－3、打越－1、山王山－2、鳥山馬込－1、北川貝塚－3）である。大原 2 式新段階では 13 点（北川貝塚－4、釈迦堂－2、大原－7）で、総計 50 点を数える。

以上のうち大原遺跡土器は 16 点で、全体の 3 分の 1 にとどまっている。大原遺跡土器が半数以上を占める大原 1 式新・2 式新段階は納得しやすいが、まったくない同 1 式古段階と、4 分の 1 にとどまる同 2 式古段階とを「大原〇式」と呼ぶのは釈然としない。小林様式論の「物として実在しない」が思い起こされる。しかし、仮に北川表の上・北川貝塚の土器を加えると計 31 点（6 割）となるので、むしろ「北川谷式」の方がふさわしいと思われる。

大原式の分布領域は、鶴見川下流域を中心に、北が渋谷区鶯谷遺跡、西が横浜市青葉区釈迦堂遺跡、南が同市栄区笠間中央公園遺跡となっている（新論図 16）。この中に南関東弥生後期土器編年に関わりをもつ東京都大田区久ヶ原遺跡、横浜市鶴見区二ッ池遺跡、同市都筑区大原遺跡、同市港北区新羽大竹遺跡、同区日吉台遺跡などが集中している。久ヶ原遺跡と新羽大竹遺跡の距離は約 11km で、鈴木正博のいう「一型式」の範囲内である（図 1）。

大原式は、二ッ池式と久ヶ原Ⅱ・Ⅲ式の否定の上に成立したものである（旧・新論）。久ヶ原Ⅲ式の中には大原遺跡土器が（安藤 2019）、大原式の中には二ッ池遺跡土器が含まれている。南関東弥生後期土器編年の中に、「様式」と「型式」、二ッ池式・久ヶ原Ⅲ式・「大原式」が入り混じっており、私たちには大変わかりにくい状況となっている。もともと弥生町式は小分布圏を十分に把握していないという批判からの研究結果であろうが、それぞれのイメージが湧きにくいという側面もある。また大原式の分布領域外遺跡にある弥生町式や東京湾岸系土器を、「大原式」と呼んで良いのか判断が困難である。これらと深い関わりを有する朝光寺原式に関わった一人として、その行方を注視している。

6

「大原式」は、久ヶ原式・弥生町問題の解決を目指して設定されたものである（旧・新論）。岡本孝之はこの点について、「大森・弥生論の一つの顕在化であって、編年論にとどまるものではない」という（岡本 2015）。そうすると大原式は大森・弥生論にどのように寄与するのか、その展望にふれる必要があろう。

大森・弥生論は日本列島の文化が、①大森（縄文）蝦夷アイヌ文化と、②日本文化との二つで構成されている。大森文化は縄文前期から続期をへて現代のアイヌへと引き継がれている。日本文化は三万田文化に始まり、弥生文化などをへて、日本（明治）政府に至り、両者は「敵対関係」にあるとする（図 5）。

第4表 大森（縄文）蝦夷アイヌ文化と日本文化との関係

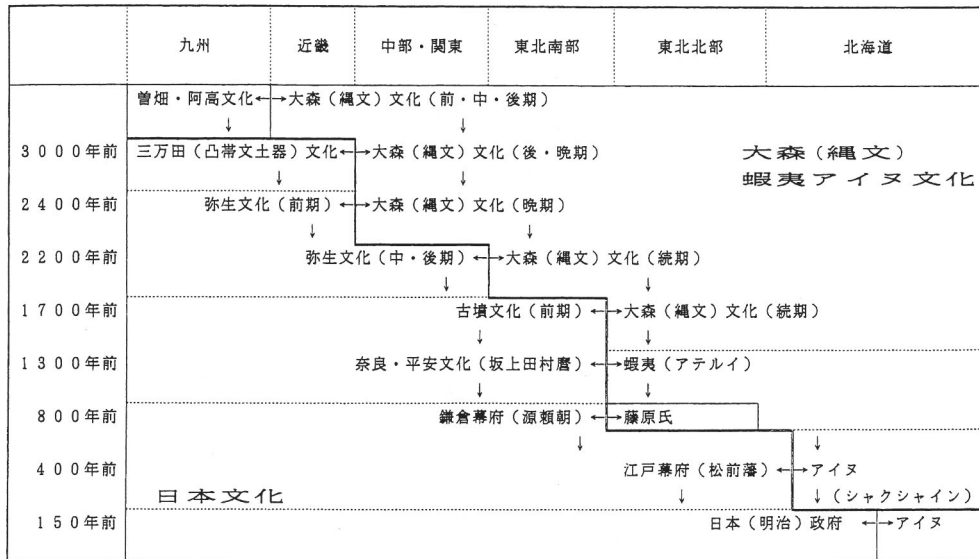


図5 大森・弥生論（岡本 1991 原図）

同論の源流は、夏島・稻荷台式併行論にみられ（岡本 1972）、『東日本先史時代末期の評価』で大成され（岡本 1974）、新羽大竹遺跡の久ヶ原・弥生町式併存説で確立された（岡本 1980）。基本的には二文化併行論であり、空間的には南北二系統論とみられよう。管見によれば同論に批判を加えたのは石川日出志のみである（石川 1995）。

その岡本編年と古屋編年を図示すると、およそ次の通りである。

【岡本】（大森） 条痕文・須和田・久ヶ原式

（弥生） 中里・宮ノ台・弥生町式

（北） 下戸塚式
【古屋】（弥生） 宮ノ台・久ヶ原・大原式

岡本は 1980 年以降、弥生土器に関する論考がほとんどなく、90 年代以降は研究対象を石器に絞っており、「縄文的要素を消し去るための時間・期間が弥生時代」としている（岡本 2015）。

古屋は弥生町式を解体して、目黒川を境に南北二様式に分け、北を下戸塚式、南を大原式とする。上記のように、二つの見解はまったく対立しており、久ヶ原式を前提とする大原式が成立するためには、ニッ池・久ヶ原Ⅲ式の検討もさることながら、久ヶ原式を（弥生）の系統に引き込むことが求められる。

西相模考古学研究会は、南関東の弥生時代を中心とした研究グループとして重きをなしている（西相模考古学研究会 2023）。弥生土器研究をメインとする論客がひしめき合い、あたかも“関東の梁山泊”といった趣がある。当然弥生後期土器も大きなテーマとなり、何回もシンポジウムを積み重ねている。しかし、いくつかの記録を見る限り、大森・弥生論に関わる討論はあまりなされていないように見受けられる（『考古学リーダー』5・16・24 など）。

久ヶ原・弥生町併行論が提示されてから今年で半世紀、混迷した南関東弥生後期の土器研究は未だ出口が見えない。こうした状況を次の世代に引き継いで良いのだろうか。幸い西相模考古学研究会には、この問題を提起した岡本会長をはじめ、安藤広道・伊丹 徹・大島慎一・立花 実・西川修一・古屋紀之・渡辺 努などの諸賢が揃っている。この問題を解決できる最強の陣容であり、他の研究グループではまず不可能とい

えよう。賢者たちが知恵を絞り抜いて久ヶ原・弥生町問題の解決、ひいては大森・弥生論への取り組みをさらに強めることが望まれる。

おわりに

2025年の夏は、この百年で最も暑く、6,000年前の縄文海進の時期に近づいている。降って湧いた小文作成のために、近場の図書館で関係本を急いで探したら、もともと鈍い頭のキャパシティがさらに狭まり、相応の拙文となってしまった。

この数年、宮田と共に続けてきた朝光寺原式土器の資料化は、専門研究者によって確立した編年や共伴関係などの土器論を目指したものではない。半世紀前の型式提唱以降長く等閑に附されてきた未公開資料を、少しでも周知化したいという思いのみである。

発掘調査体制確立以前、1960年代後半の事前調査は、今日では考えられない程の悪条件の中で行われた(田中 2019)。その結果、未整理・未報告の遺跡が多数存在することは周知の事実である。南関東の原始古代史に欠くことのできない、稲荷前古墳群・朝光寺原遺跡・長者原遺跡(都筑郡衙)も報告書未刊である。

朝光寺原遺跡は、日本で最初に方形周溝墓を伴う環濠集落の全容を明らかにしたことにより、弥生時代研究史の中に位置づけられる。同時に、北関東の樽式とよばれた櫛描波状文土器を、朝光寺原式へと昇華させた標識遺跡でもある。しかしそれらの記録・遺物は、この60年間空しく収蔵庫に眠ったままである。神奈川県唯一の古墳時代甲冑も出土しており、一日でも早い整理と報告書の刊行が鶴首される。

(2025年10月31日稿了)

小文作成にあたり、懇切丁寧にご教示いただいた渡辺 務さん、古屋紀之さん、安藤広道さんに深謝いたします。

原稿作成には、宮田 毅・裕紀枝さんのご協力を仰ぎました。心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- 安藤広道・岡本孝之ほか 2019『日吉台遺跡群発掘調査報告書－2006～2014年度の調査成果』慶応義塾大学文学部民族学考古学研究室
- 石川日出志 1995「岡本孝之氏の弥生時代観を排す」『西相模考古』第4号 西相模考古学研究会
- 石川日出志 2003「関東・東北地方の土器」『考古資料大観 第1巻』小学館
- 伊丹 徹 1992「様式論をやさしくしよう」『西相模考古』第1号 西相模考古学研究会
- 岡本 勇・武井則道 1969「朝光寺原式土器について」『昭和43年度横浜市埋蔵文化財調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 岡本孝之 1972「稲荷台文化の展開(1)・(2)」『古代文化』第24巻1・2号 古代学協会
- 岡本孝之 1974「東日本先史時代末期の評価(1)～(4)」『考古学ジャーナル』97・98・99・101 考古学ジャーナル社
- 岡本孝之 1980『新羽大竹遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告17 神奈川県教育委員会
- 岡本孝之 1991「杉原莊介と山内清男の相克－または弥生文化と大森(縄文)文化との関係について－」

『神奈川考古』第27号 神奈川考古同人会

岡本孝之 2015「大森と弥生－文化関係論の展望－」『列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』六一書房

神村 透 1988「中島式・箱清水式土器の分布」『長野県史考古資料編－全1巻（4）遺構・遺物』長野県史刊行会

神沢勇一 1966「関東」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社

黒沢 浩 2005「第Ⅲ部 シンポジウム討議記録」『南関東の弥生土器』考古学リーダー5 六一書房

小林行雄 1938『弥生式土器聚成図録 正編』東京考古学会

坂上克弘・鈴木重信ほか 2009『北川表の上遺跡』港北ニュータウン埋蔵文化財調査報告42 横浜市教育委員会

坂本 彰 1975「付録 鶴見川流域の弥生時代遺跡一覧表」『歳勝土遺跡』港北ニュータウン埋蔵文化財調査報告V 横浜市埋蔵文化財調査委員会

坂本 彰・鈴木重信 1982『横浜市大原（新吉田第7）遺跡の調査－弥生時代後期の集落址を中心として－』『第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』

坂本 彰・山田光洋ほか 2007『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告39（公財）横浜市ふるさと歴史財団

坂本 彰 2021a「横浜考古学史Ⅰ・高津真亮」『横浜市歴史博物館紀要』第25号 横浜市歴史博物館

坂本 彰・宮田 毅 2021b「幻の朝光寺原式土器基準資料－櫛描波状文のある台付甕」『利根川』43 利根川同人

坂本 彰・宮田 毅 2022a「朝光寺原式土器の根源的研究－朝光寺原・三殿台遺跡を中心に－」『横浜市歴史博物館紀要』第26号 横浜市歴史博物館

坂本 彰・宮田 毅 2022b「「荏田式土器」の再検討」『利根川』44 利根川同人

坂本 彰・宮田 毅 2024「続・朝光寺原式土器の根源的研究－大場富士塚遺跡の弥生土器をめぐって－」『横浜市歴史博物館紀要』第28号 横浜市歴史博物館

坂本 彰・宮田 毅 2025a「続々・朝光寺原式土器の根源的研究－横浜市青葉区大場町稲荷前弥生集落址について－」『横浜市歴史博物館紀要』第29号 横浜市歴史博物館

坂本 彰・宮田 毅 2025b「川崎市高津区下作延遺跡出土の弥生土器について－『日本先史土器図譜』第V輯No.46・48-1の再発見－」『長野県埋蔵文化財センター年報 2024年度』長野県埋蔵文化財センター

杉原荘介 1939「上野樽遺跡調査概報」『考古学』10巻9号 東京考古学会

杉原荘介 1964「南関東地方」『弥生式土器集成 本編』東京堂出版

鈴木重信・古屋紀之ほか 2011『大原遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告44 横浜市教育委員会

鈴木正博 2009「「久ヶ原2式」への接近」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー16 六一書房

田中義昭 2019『開発と考古学 市ヶ尾横穴群・三殿台遺跡・稲荷前古墳群の時代』新泉社

田村良照・戸田哲也・麻生順司 1997『横浜市観福寺北遺跡群関耕地遺跡発掘調査報告書』観福寺北遺跡発掘調査団

田村良照 1998「朝光寺原式の属性（前編）－観福寺遺跡群の検討から－」『神奈川考古』第34号 神奈川

考古同人会

- 田村良照 2013「朝光寺原式の属性（後編）」『神奈川考古』第39号 神奈川考古同人会
- 橋本裕行 1980「朝光寺原式」『南関東の弥生土器』考古学リーダー5 六一書房
- 浜田晋介 2009「朝光寺原式土器の編年と共伴土器」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー16 六一書房
- 浜田晋介 2015「コメント 朝光寺原式土器からみる集団構成論メモ」『考古学リーダー24 列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』六一書房
- 浜田晋介 2018「10. 土器の研究方法－山内清男と小林行雄－」『弥生文化読本－学史から読む研究のあゆみ－』六一書房
- 比田井克仁 2022「関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観 第2巻』小学館
- 西相模考古学研究会 2023「会則」『西相模考古』第30号 西相模考古学研究会
- NEIL GORDON MUNRO 1911『PREHISTORIC JAPAN』（自費出版）
- 平子純一・鹿島保宏 1989『観福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 古屋紀之 2014「第3章 第2節 弥生時代終末期～古墳時代前期前半」『権田原遺跡Ⅲ 弥生時代後期～古墳時代前期編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財発掘報告47（公財）横浜市ふるさと歴史財団
- 古屋紀之 2018「久ヶ原・弥生町問題再論」『西相模考古』第27号 西相模考古学研究会
- 古屋紀之 2025a「久ヶ原式の後継様式－幾何学文壺の系統整理と大原式の設定－」『石川日出志明治大学教授定年退職記念論集 斗酒百篇－弥生時代探求－』石川日出志明治大学教授定年退職記念論集刊行会
- 古屋紀之 2025b『北川遺跡群 北川表の上遺跡・北川貝塚・権田原遺跡・大原遺跡－土器から見た関東・弥生時代後期の世界－』（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 松本 完 1993「南関東における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚－久保哲三先生追悼論文集』
- 山内清男 1939『日本遠古之文化』先史考古学会（1967年新刷）
- 山内清男 1940「弥生式土器」『日本先史土器図譜』第V輯 先史考古学会（1967年新刷）
- 山内清男 1964「縄紋式土器・総論」『日本原始美術Ⅰ』講談社（1972年版）
- 和島誠一編 1965『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社
- 渡辺 務 1989『釈迦堂遺跡』日本窯業史研究所報告第25冊 日本窯業史研究所
- 渡辺 務 1994『横浜市緑区 赤田地区遺跡群 集落編Ⅰ－No.1遺跡、No.2遺跡、No.6遺跡、No.10遺跡－』日本窯業史研究所報告第45冊 日本窯業史研究所
- 渡辺 努 1995「朝光寺原様式の基礎的研究」『王朝の考古学』雄山閣
- 渡辺 務・伊東秀吉ほか 1997『川崎市多摩区 長尾台北遺跡発掘調査報告書』長尾台北遺跡発掘調査団
- 渡辺 務 1998『横浜市青葉区 赤田地区遺跡群 集落編Ⅱ－No.12遺跡、No.14遺跡、No.15遺跡、No.17遺跡－』日本窯業史研究所報告第48冊 日本窯業史研究所
- 渡辺 務 2003『釈迦堂遺跡第2地区』日本窯業史研究所報告第58冊 日本窯業史研究所
- 渡辺 務 2003『横浜市青葉区 寺下遺跡』日本窯業史研究所報告第60冊 日本窯業史研究所
- 渡辺 務 2025「朝光寺原式土器に関する坂本・宮田論文に接して」『利根川』47 利根川同人

編集後記

本号は、研究ノート一編、資料紹介一編を掲載しています。

坂本彰氏は宮田毅氏とともに、二〇二一年より本紀要および他誌にて朝光寺原式等にかんする研究を発表されてきました。今号掲載の研究ノートは、これらに対する研究者諸氏からの意見へのレスポンスとして位置づくるのです。坂本・宮田論文が掲載されている既刊の紀要二五・二六・二八・二九号も、ぜひ併せてご参照下さい。

仲泉資料紹介は、戸塚宿の間屋をつとめた旧家に残された、古文書を再利用した「たとう紙」をとりあげたものです。本資料は博物館実習にて剥離復元、資料整理、調査研究、展示作成まで一連の作業を実施しました。本資料報告では、そこに書かれた内容の翻刻を掲載しています。資料の修復、教育普及、ならびに近年注目されてきている反故紙の資料的価値の発見など、当館の博物館活動の成果が反映されています。

本号の内容は、当館と当館に集う方々の多彩な活動の成果です。多くの方に読んでいただき、広く活用いただければ幸いです。

（小林紀）

横浜市歴史博物館 紀要 第三〇号

二〇二六年三月 発行

編集 横浜市歴史博物館

横浜市都筑区中川中央一―一八―一

電話 〇四五―九一二―七七七七(代)

発行 公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

制作 株式会社佐藤印刷所



横浜市歴史博物館

YOKOHAMA HISTORY MUSEUM